Lily of firld

らりっくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｉｌｙ　ｏｆ　ｆｉｒｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ４９０５Ｙ

【作者名】
らりっくま

【あらすじ】
騎士と幼い姫のお話。
＊自サイトでも連載中

0. The Princess Knight.

騎士と小さな姫君絵本を読み聞かせてくれたのは、いつも男の子でした。

小さな女の子を相手にずっと自分の作ったおとぎ話を読んで聞かせてくれました。

まだ言葉がうまく分からなかった時も女の子は絵本を聞いて泣いたり笑ったりしました。

それは男の子が女の子のためだけに描いた絵本だったからでした。

小さな小さなお姫様に小さな騎士はずっと絵本を読んでいてくれました。

女の子は楽しく聞きます。

眠くても寝てしまう直前まで頑張って起きていようと耳を澄ませました。

男の子は嬉しくて語ります。

話を止めると女の子は少し不機嫌になってしまうので、寝てからも続けました。

毎日、毎時間、毎分、毎秒、止まることなく進んで行きました。

そして、女の子は少女になって男の子は騎士になり青年になりました。

２人の考え方も少しずつ成長して行くのです。

そして、青年は突如思います。

〝自分の意思でやっていたはずの少女の遊び相手なのに、それは実は強制だったのか。
じゃあ、自分の意志だと思っていたものは何だったのか。責任感を意思と間違えていたのかもしれない。
そうか、自分はバカだった。所詮は「王女」と「騎士」だったのに。〟

それからの青年は空想の世界を閉じて責任感だけで少女に接するようになりました。
少女はそれがとてもとても悲しくて、いつしか家族を好きじゃなくなっていきました。
「騎士」という仕事を与えたのが家族だと思ったからです。
ついには、そんな風に考えてしまう自分を嫌いになっていってしまうのでした。

仕事を与えたのは確かに家族だったけれど、与えざるを得なくなったのは自分がいたからだと思ったからです。

自分の事が嫌いになって嫌いになって、もう、自分がいる理由が分からなくて泣きたくなりました。

だって少女は騎士が一番近くにいる世界しか知らず、その世界だけが欲しいのに、そう思うことは絶対に許されない事だったからで

す。

はじまりはじまり

?. Pity is akin to love.

「ウルエ様」
片脇に本を抱えて硝子の壁に囲まれた緑の中をジグザグ縫うように進み、もう一度声をかけた。
「ウルエミシュカ様、どこにいらっしゃいますか」
そして返事を待つ。
足は止めずにまた名前を呼ぶ。
だが返事をするのは外から紛れ込んで空に帰れなくなっている野鳥ばかりで、ここには人間が自分しかいないのではないだろうかと思えた。
「お勉強の時間でございます、お部屋にお戻りください」

外の広さに比べれば窒息してしまいそうなくらい狭いこのガラスの中でも、少女一人を隠してしまう広さは充分過ぎる程あったらしい。
探しても探しても見当たらない少女。
これがもし、青年ではない他の使用人だったならさっさとここではないどこかに探しに行っていただろう。
けれど、青年はここ以外は探そうとはしない。

「ウルエミシュカ様、外の鳥をやたらに温室に入れるのはおやめなさい、と申しましたでしょう」

まだ見つけられていない少女に聞こえているのか聞こえていないのかわからないけれど、あたかも目の前にいる人間に語りかけるように声を出す。
だが、当然返ってくるのは鳥の鳴き声。もしくは自分の足音だけである。

いったいここに入ってからどれくらい時間がったのか、たまたま時計を持ち歩いてなかった彼には確認するすべがなかった。
けれど、鳥たちがまた少し騒ぎ始めたのを思うと今は3時ごろなのだろうか……。

そもそも自分が探しださなくとも少女は時間になれば一人で戻ってくるだけの考えは持っているのだが、足が動いて声は名前を呼び耳は返事を待ってしまう。
「ウルエ様」
見えない姿に声をかけてみるが返事は無くて、その代わりに巣から落ちたのか青い羽根のひな鳥が綺麗とは言えない声でぴぃぴぃと鳴いている。
それがただ鳴いているのか、彼が探し続けてる少女の名前に反応して何か言葉を伝えようとしてたのかはわからないが、青年は土からそれを拾い上げて話を聞くみたいに耳を傾けた。
結局は何も分からなかったけれど笑って言った。
「そうか……。……なぁ、お前は空のところへ行けるか?」
それに答えを返してほしかったわけではなく、なんとなく、親とはぐれて寂しがっているのだろうひな鳥に聴いてみたいだけだった。

瞬間。
鳥たちの声が止む。

ほんの一瞬だけだったが風のすり抜けるその一瞬は、確かに野鳥以外の声と呼べる音と雑音を耳に入れることができた。
ギスギスした騒音に思える鳴き声たちがまた溢れだす。
手の平に軽い重さを感じ目線を落とすと、鳴くだけだったひな鳥がシンと黙り2回3回肌を踏みしめると、たたんでいた羽根を広げて羽ばたき浮いた。

飛んだという表現では弱々しすぎる姿で、自分の背くらい伸び壁のように敷き詰められた木々の奥へ進んでいった。

「……何を、していらっしゃるんですか」

後に続いて少しの隙間をすり抜ければ、ひな鳥の視線の先には、小さい身体をさらに小さく縮めて肩を震わせながら土を掘り返している少女がいた。

「……」

「っ……。ひぅ……っぅ……」

「ウルエミシュカ様」

「……っ」

「……ウルエ様」

しゃがんで背中から声をかける。

少女の肩越しに前を見ると、ひな鳥とよく似た色の物が横たわっていた。

目も明かない状態で白いハンカチの上で眠っている。

肩が動くたびにしゃっくりみたいな呼吸が繰り返されて、彼は苦しそうだ。と思った。

穴のあいた土の中にハンカチごと沈めてその両端に持った土を少しずつ流し込んでいく。

その中に向かってピィと鳴いているのを見ると、きっとこれが親鳥だったのだろう。

土が元の場所に全部戻って、少し山ができた。

少女の手は土でドロドロになっていて、彼女のためだけに作られたワンピースは、足元にかけて派手にグラデーションが付け加えられていた。

「ご自分で作られたのですか？」
訊ねながら先ほどの一瞬に聞こえた雑音の正体を確信する。
彼女は頷いて、手で顔をこすり初めて青年を振り返った。
大きなひとみは涙でぬれて充血しているし、目の橋はこすられて赤くなり涙の痕には土が混じっている。
肌がこれ以上赤くならないように、彼は何も持っていない手の親指で涙を拭いてズボンから取り出したハンカチで軽く土を落とした。

「……っ、おともだち。だったの……」
丸い目が下を向いて、視線と一緒に顔も俯き小さな手をぎゅっと握りしめ、震えていた。
それを見て持っていた本を置いた後少女の手を両手で全て覆い包む。

「ですから、やたらに野鳥を温室に招き入れるのはおやめなさい。と申したでしょうに。彼らには狭すぎるのです、ここは」
彼女の涙はまだまだ止まらなくて息はいまだに苦しそうだ。
「じゃあね、」
そう短く言って青年の手を抜け近くの木々の下に群生する薄紅色の小さい花を数本摘んで、元の場所に戻って座る。

「この子たちに狭すぎる、この世界は……」
花をキレイに束ねて紙に結ばれていたリボンで歪ながらも飾り、出来上がった可愛らしい花束を小さな小さな山の上に置いた。
「この場所っていう世界はね」
しゃがんで頭をかしげて土をなでる。
「もっと、
もっとウルには狭いの」

青年の耳にはもう少女の声しか聞こえなかった。
幼い声、泣いた後の呼吸の乱れた息、それだけが糸電話を通しているみたいに吸い込まれてくる。

少女の髪が揺れる。
風で服が波打つ。

「お外は遠いわ」

彼は本を持って立ち上がり墓の前に座る子の横顔を片膝を着き正面に見つめる。
「戻りましょう、ウルエ様」
「シトロ」
ウルエが名前を呼ぶとシトロはもう少し身をかがめて、ぐっと伸ばしてきた両腕の間に入り込む。
そのまま背中を引き寄せて、少し身体を起こしながらすくうように身体を持ち上げる。
立ち上がり、少女は落ちないように自分の腕を青年の首にまわした。

「ねぇ、シトロ」
すっかり落ち着いた息でつぶやく。
首を抱きしめる少女の腕の暖かさ、額の熱、息の温かさが自分に溜まって、顔に血が上り発熱しているような感覚に陥る。
風を浴びたいと強く思った。
「いつか読んでくれた絵本みたいに、どこかに連れて行ってほしいと言ったら怒る？　」
「そうですね」
「じゃあ、言わない。だからお部屋でその時の絵本を読んで？
そのあとちゃんとお勉強もするから」

少女の重みを感じながら「はい」とだけ答えた。
足元のひな鳥を間違えて踏みつけてしまわないように見ながら、ここに来るまでの道を今度は一直線に出口を目指し、抱える少女が枝で傷など作ることのないように緑の中をすり抜けて歩く。
うとうとと眠りの中に沈みそうになりながらウルエは木漏れ日が浮いているシトロの頬を自分の手で温めて手の甲に光を映す。
「ねえ、シトロ」
「はい」
「行きたいところがあるって言ったら連れて行ってくれる？
お部屋に抱っこしてくれるみたいに、ウルを運んでくれる？
”どこかに”じゃなくて”ウルの行きたいところ”ならどんなに遠くても行ってくれる？　ううん、遠くなくていいの。
あのね、ここじゃなくて……お部屋でもなくて、お父様やお母様のところでもお勉強部屋でも、お遊戯場でもなくて、ただこのお城の門から出るだけでいいの。
ってそう言ったら、連れて行ってくれる？　」
眠さもあって口はゆっくり動く。
数歩進んで、その間は長く沈黙が続いたように思える。
「……陛下に、お許しを頂ければ」
そう彼は応えた。

「……もしもずっと一緒にいてって言ったらいてくれる？　お父様がそう言わなくても」
「陛下がなんともおっしゃらなかったら、ウルエ様が私を必要とする限りおそばにいましょう」
「シトロの描いた新しいお話を呼んでって言ったら？　」
「努力いたします」
「ぎゅって苦しくしてっていったら？　」
「苦しくならない程度にいたしましょう」
「ちゅうして」

一度腕から少女を下ろして立たせる。
その背丈に合わせて、自分の膝を折り片ひざは地面に接着する。
右手で、小さい左手を拾い上げて、その甲に口づけをした。
その動作を見詰めたままどちらとも何も言わずに黙ったままだった。

沈黙に、「恥ずかしくて」「嬉しくて」「緊張して」なんて言葉は含まれず、彼女はただ心から何も言うことがなかったので言わなかっただけで、彼は言われたことをこなしたまでで。
相手が何も言葉を発しないのでこちらから聴くこともないわけで、相手が何も聴いてこないのでこちらから話すこともないだけ。
そんな沈黙だった。

また少女を抱きかかえ直し、歩き出す。
直進して温室の扉は開けたまま、城の中に戻り、もう何度も行き慣れた階段と廊下を渡り部屋の前にいた使用人に扉を開けさせる。
夕日が差し込む部屋は綺麗だった。
小さく手で【引け】と指示をだし背中を確認してから一歩中に入り腰を折り曲げながら腕の力を解く。
首にある温もりが離れて、背筋を伸ばした。

「メイドを呼んでまいります」
言いながら足が動いてあけっぱなしの扉から身体を出し何かに引きとめられた。
「いいの、一人で大丈夫」
土だらけの手が掴んだ服が同じ土に汚れて、後ろへと振り返った正面はさらに泥だらけだった。
「ごめんなさい、お洋服……シトロの汚れちゃった……」
「いえ、お気になさらずいてください。では、支度を整えてまいりますのでウルエミシュカ様も身支度が整いましたらお呼びください

」

ただ頷き返事をした。

シトロは足を揃えて肘を胸の前で折り礼をする。

頭をあげて両開きの扉を閉め足音は遠くへ消えていく。

ウルエは閉じた板を見つめて電気をつけるのも忘れていた。

?. Scratch my back and I will scratch

王城の長い廊下を歩くのはシトロメニ・ランドニック。
ファンドールという小国に仕える近衛騎士団長であり、次期6代目国王の側近でもある彼は二十歳をこえたばかりで若いが何事も優秀にこなす人材だ。
ランドニックの家は代々で王の側近を務め、その肖像画は歴代の王たちの隣に小さく描かれていて、現王ハルバートに仕えるシトロメニの父ガンドーもまた引退の時には飾られることとなるのだろう。

シトロの歩く長い廊下の途中には使用人が立つ扉がある。
その前で立ち止まり手で指示すると相手は一礼したのちに今来た道を歩いて行った。
少し、息を吸いかるいノックをゆっくり2回鳴らす。
コンコンと木の音がして、中から少女の声で「はい」と返事が返ってきた。
扉をあけると、窓の縁に座り日光を浴びながら読書で下を向いていた視線が上がり、目が合うとニコリと微笑む。

その少女はウルエミシュカ・ロンド・ファンドール。
ファンドール国の第一王女であり、次期6代目ファンドール王だ。
「おはよう、シトロ」
「良いお目覚めの様でなによりです。朝食の後、陛下の元へと伝言を承っております」
「うん、わかった」

彼女はまだ幼く、この世に生まれてから十年しか経っていない。
しかしその知識の量はありがたくも大人に負けないほどのものを持っていた。

このファンドールの国では王位争いを避けるため、代々王家の子供は一人しかいなかった。
当然、権力を低く見られがちな女児より両親は男児を望んでいたのだがその願いは叶わなかった。
そんなことも知ってかウルエは王に相応しくあるためといつでも本を読み、学ぶことを嫌がらなかった。それどころか自ら様々な書物を読みあさるなどした。

閉じた本をすぐ近くの机の上に置いて、こちらへと駆け寄る。
「ウルエミシュカ様、本日はいかがなさいますか」
「ミッシェルさんにまかせる」
「かしこまりました、コック長に伝えておきます」
「コック長さんは違う人でしょう？　ミッシェルさんじゃないと意味がないの」
「……かしこまりました、ミッシェル・フロートにお伝えいたします」
小さい主にそう返しながら一歩後ろの距離を保ち続けて歩いた。

場所は変わり城の一階にある大広間にはハルバート王とその妻リリアンヌ王妃、その二人に負けないぬ装いをした青年二人とその後ろに控える燕尾服の老いた男が対面している。
「本日はお招きいただき光栄です。父の不在が実に悔まれます」
「いえ、お気になさらず。こうして来訪でお返事いただけるとは思っていなかったので」
「手紙で書くよりも、善は急げと申すでしょう？　」
銀髪が白い肌と合わさり彼の線の細さを更に強調させる。
その隣で、入ってきたときと変わらず頭を軽く下げたままだった青年もまた銀に輝く髪を持っている。
「そう思っていただけたのなら幸いです。さ、中の方へ」

いまだ扉の近くに立つ自分達にその人柄が出るような笑顔で部屋の中へと案内した。
互いに席に着くと控えていたファンドールの使用人が香りのいい紅茶とお菓子を軽く並べ扉を出て行く。
「さっそく本題に入らさせていただきますと、こちらの返答は勿論、承諾と言うことで形は整えております」
「そうですか、それはありがたい。そのお言葉を頂くまで肝が冷え切っておりました」
「……ですがファンドール程の資産や文化があれば、より大国への申請もできたのでは？」
「いえ、とんでもない。それに貴国の文化ほど私が目に焼き付いている物はありません」
王は懐かしむような笑顔のまま言った。
その顔をにこやかに眺めているイシカが嬉しそうに口を開く。
「感謝いたします」
そう微笑む彼を見れば自分の国を本当に好きなのだろう。
「しかし、よろしいのでしょうか……」
緊張で思ったよりも口が渇いていたらしく、王から出た声はかすれて聞こえた。
少し温度の低くなった紅茶で唇を潤滑にさせる。
「と、申しますと？」

一方では食堂で静かな会話が聞こえる。
「今日はお母様もいないのね」
そう言うウルエの声にはさびしそうな感情が読み取れなかった。
長方形のながいテーブルには綺麗な白いレースのテーブルクロスが敷いてあり、二人だけしかいない広い空間が更に広く感じた。
「本日はお客様がいらしていて、お二人とも大広間にいらっしゃいます」

「そうなの」
「はい」
「ねぇシトロ」
「はい」
「ミッシェルさんに美味しかったって伝えて？　」
「かしこまりました」

数少ない会話をウルエは楽しく感じ、その場を後にして両親の待つ広間へとシトロを連れて向かった。

着いた扉の中からは若い男の声が聞こえる。
その一歩手前で止まって、後ろを振り返り両腕を広げた。
そのまた一歩後ろに付いていたシトロは片膝をついてウルエと同じ目線になると、首元のリボンや襟を再度直した。
一通りチェックを終えると少女は右手を彼の前に出して止める。
男は何も言わずにその手の甲に敬愛のキスをした。

部屋の中では2回のノックが鳴って、中から使用人が扉を開ける。
「あぁ、ウルエミシュカお入りなさい」
前にいるリリアンヌが手招きをすると一回うなずき両親の元へ歩いて行き、後ろにいた男は付いて来ることなく、入口から一歩入り扉の前で待機をしている。
年のわりには落ち着いている子供だ、昔の弟を考えるとそう思わずにはいられない。
「さ、ウルエミシュカ。ご挨拶なさい」
王は王妃との間に立ったままの娘の頭を撫で言うのを見て、銀髪を揺らしながらイシカがすぐさま立ちあがった。

「いえ、来訪したのはこちらですので、私(わたくし)どもからさせてください」
言ってから胸に手を当て腰を折る。

「初めましてウルエミシュカ・ロンド・ファンドール姫。私はイシュルツカ。南にあるチェイルネットの国からやってまいりました、次期第3代目チェイルネット王。第一王子イシュルツカ・ハイデン・チェイルネットであります。どうぞ、気軽にイシカとでもお呼びください」
そう言ってから隣にいる弟を小さく呼ぶと、彼はさっと立ち上がり自分の真似ごとのような礼をする。
「ご機嫌麗しゅう、姫。隣の兄と同じくチェイルネットの国からやってまいりました、第二王子フォンベーチェヌト・チェイルネットです。フォンとお呼びください」
安心しきって見ていられないその挨拶にため息が出そうになる。

二人の自己紹介が終わると、少女はワンピースの裾を少しもち、スカートをふわりと持ち上げ頭を下げた。
正直、フォンベーチェヌトより年が五つも下の少女に兄のイシュルツカは礼儀など期待していない。
幼い頃から自分も教養やら礼儀やらとしつこく飽きるほど教えつけられていて、あのくらいの年には他国の挨拶へと父ヴェグリューに連れまわさせた記憶がある。
それでもまだ子供、十そこらの年齢だったので気の利いた言葉や考えというのは出来なかった。
だからこそ、尚も必死に勉強をして今では王代理という事までこなせるようになったが、何も変わろうとしない勉強を嫌がる弟の不出来さに内心とても苛立っていた。

「ご紹介いただきご光栄です、イシュルツカ殿下フォンベーチェヌト殿下」

その子供らしくない笑顔と言葉に違和感を覚える。
まだ動きの端々に幼さは残るものの、立ったままの自分達を座るように促す手や注がれる視線、自身が話だす間の空け方。
誰が見ても彼女はその年に不相応なくらい、礼儀を知っているようだった。

「次期第6代目ファンドール王ウルエミシュカ・ロンド・ファンドールでございます。本日はご来訪、心から歓迎し、我が国のおもてなしを存分にお楽しみ頂ければ幸いでございます」
そう言い終えて少女が顔をあげると、イシカはただ笑顔しか知らないような表情を見つめるばかりだった。

よくできた。そう頭を撫でられる少女に大げさにも拍手を送りたくなってしまう。
しかし、もしかしたら本当の王族とはこれが普通で自分はあれほど頑張ったと驕っているだけだったのかもしれない、と思った。
この少女をそんな風に思っているのは自分だけなのかもしれない。
「私どもも、貴女のような素敵な姫に出会えて光栄です」
頭を落ち着かせようと、少ない言葉で終わらせる。

一呼吸おいてハルバートは一度咳払いをし、「さて、当人もそろった」と話を始める。

「彼、フォンベーチェヌト王子がお前の婚約者だよ、ウルエミシュカ」
彼女は一度目を見開いた。
「彼をフォンドールに迎え入れさせていただくことになった。お前も、もっと『この国』の役にたつよう励みなさい」
「はい、お父様」

ハルバートから目を逸らすことなくそう告げると、また笑顔をこちらに向け「そうとは知らず失礼いたしました……フォン殿下」と呼び名を窺うように言った。

「ええ、はい」

「殿下のような方に相応しくあるよう努めます。そしてファンドールに正式にいらした際にはずっと殿下のお傍にあるように致します、ここで」

また笑顔を見せるウルエミシュカという少女にイシュルツカは確信を抱いく。

（……この小さい少女は王族というものしか触れてなく、ここだけが自分の世界なのかもしれない）

?. The Princess Knight is far closer

大広間で軽い会話をした後、部屋から出たウルエとシトロはどちらとも何も言わず静かに廊下を歩いていた。
窓の外を見れば高い壁が閉塞感を出していて、シトロはあまり見ようとしない。
ただでさえ、息苦しく思える建物の中なのに外を見ると更に圧迫感を覚えうんざりするからだ。
けれど、うんざりとすら感じた事がないだろうと思われるウルエは、毎日窓の外を見ている。
今も歩きながら城壁と空しか見えない窓の外を眺めながら自分の一歩前を歩幅を変えずに歩き続ける。
使用人が毎日雑巾でふき取っているおかげで曇りひとつないガラスは彼女に何を見せていて、何を想像させていて、何を期待させているのだろうか。
もしかしたら何も考えていることなく眺めているだけなのかもしれないけれど、後姿だけでは何も分からないのだ。
だが確かめる気もなく外をみる少女の後姿を見失わないように見つめるだけで終わる。

「ねぇ、シトロ」
振り向かないで呼ばれる。
「はい」
いつものように返事をして彼女がこちらを見るのを待った。
けれど、少女の顔は外を向いたまま。
「ウルはずっとここにいなくちゃいけないのね。お外に行って好きなものを買ったりもっと遠くの景色を見に行く事もなくてここから

想像するだけなのね」
「陛下がそうお考えなのであれば」
そうは答えたものの、正直なんと言っていいかわからなかった。
ウルエの考えは少し大げさすぎるとも思いながら、王の言うことは絶対であるために、「そんなことありません」とも言えない。
だからと言ってずっとこのまま城に篭もらせることはしないだろう。
「シトロは、ずっと一緒にいてくれるんだよね。どこにも行かないでウルと一緒にいてくれるの？　」
「はい、ウルエミシュカ様が望む限りお傍に控えましょう」
その言葉は護衛騎士、又は側近として模範的な解答であり従者以外の心を持ち合わせていない答えだった。

「うそつき」

そう聞こえたのか、または自分で思ったのか。

「ウルエミシュカ様」
後ろについていたシトロが口を開く。
ウルエの生活管理などを任されている彼が懐から時計を出して針を追うと大広間から出て二十分は経っている。
「今日のご予定はいかがなされるのですか」
そう聞けばいつだってウルエは勉強をしたがった。
勉強の講師はシトロが務め、唯一彼が従者ではなく教師として、ウルエを指導する時間である。
ウルエの学習のほとんどはシトロが講師を務め、それは代々同じでハルバートもまたガンドーに講師を務めてもらっていた。
が、ウルエの知識欲は驚くもので最近では講師として指導すると

いうより自習している姿を見て聞かれた事だけをこたえている事が多い。

しかし返ってきた言葉はいつもと違い、聞きそびれてしまった為に「なんでしょう」と聞き返す。

「お墓参り。今日はまだお友達の行っていないもの」

言われて、先日温室でウルエを探していた時のことを思い出した。確かまだ木々が生い茂っていたころだったか、あれ以来温室には行っていない。

気が向かないわけでもなく、特別行きたくない理由もなければ行かなくてはいけない理由もないからだ。

けれど、ウルエの「今日はまだ」という言葉を聞くと彼女は毎日足を運んでいるのだろうか。

限りなく四季を再現しているあの空間は外よりは温かいとはいえいくらか寒いだろう。

特に今の格好を見るととても薄着に見える。

「ウルエミシュカ様。その格好では身体を冷やします」

「ううん、あそこは結構日の光があたって暖かいの」

「ですが……」

「じゃあ、シトロが暖めて。ウルを抱っこして連れて行って」

「……はい」

ウルエの前に回り片膝を着くと彼女は首に腕を巻きつけてしがみつき、こちらも落ちないように片腕で支えながら抱き寄せ何も持たないかのように軽く立ち上がる。

そのまま部屋に戻ってしまっても少女は多分何も言わないだろうが、彼は主人の命令に何も思うことなくそのまま温室へ向かう。

「あの子もシトロにすごく会いたがっているの」

それから大広間を出てから初めて主人と目が合った。

ガラスで三重にしてある扉を静かに開けて中に入ると、まだ昇り切っていない太陽の暖かさがが上から注いで彼女が言ったように暖かった。

「そのまま真っ直ぐ行って、一本だけ背の低い木があるの」

指された方へ進み、伸びている低い枝に姫が当たらないように進む。

今日はとても静かに鳥たちが鳴いている。

「みんな静かでしょ？　ちゃんとお話したらみんなで仲良くしてくれるようになったの」

高い天井を見上げながら少女は言う。

鳥と会話ができるわけがないが、彼女が言うと本当に鳥たちがこちらの言葉を理解しているかもしれないし、あの時のひな鳥ももしかしたら本当に自分の言った言葉がわかっていて不安定な翼で飛んでいったのかもしれない。

そう思えた。

奥に行くにつれて鳥の声が大きくなるが先日のようにうるさいさえずりではなく囁き合う様な声だった。

「ありがとう、ちょっと降ろして」

「はい」

ゆっくり腰を曲げながら彼女の足を地面に近づけると腕に座っていて曲がっていた脚が伸び、土を踏む。

そのまま前に進むと木と木の間を潜り抜け行き、その後を追って細い枝を押し返す。

自分にはまだ背の低い木が髪の毛をかすめていく。

視界が開けると、前より少し高く盛られた土とそこに挿された小さい十字架。

少し前に細工職人からウルエミシュカ宛てに届いたもので、宗教などに興味の無い彼女が欲しがった理由がわからなかったがここで理解した。

「今日も暖かくていい日なの。でも、土の中はもっと暖かそうね」
そう話しかけているウルエの肩に一羽の鳥が乗る。
「こんにちは、今日はシトロが来ているのよ」
そんな声にぴぃっと鳴くと羽を広げてこちらに羽ばたいて来てとっさに手を差し出した。
出した手に乗り二回三回肌を踏みしめ大人しくなると顔をじっとのぞきこまれ、理解する。ああ、あのときのひな鳥か。
「毎日来ていらっしゃるのですか」
「お友達だから。その子も寂しがるの」
挨拶を終えて満足したのか手の平からひな鳥だった綺麗な鳥は飛んで行って消えた。

「フォン殿下がいらっしゃるのはいつなのかしら」
「詳しくは聞いていませんがまだ当分先との事です」
「じゃあ、シトロは先に聞いていたのね」
「……先週ほど前に」
「うん」

そして沈黙。

吹くはずのない風が吹いた気がして、墓からこちらを見ずに話し続けた少女は「お部屋に戻る」と振り向くが視線は合わなかった。

出ていく時は自分の足で歩き、扉を三回開けて長い廊下を進んだ。

「今日は、お部屋まで来なくていい」
階段を上りきったところで背を向けられたままそう言われる。
「はい、かしこまりました」
それがこの日最後に交わした二人の言葉で、日はまだ高かった。

更に上へと続く階段を少女は上って行って、その後ろに彼がついて行くことはない。
本来、護衛として傍にいるだけのシトロは主人にそう言われてしまえばこれより上の階に上がり部屋まで見送ることすらできない。
けれど彼女が生まれてから十年間、こんなにも手前で彼女を見送ったのは初めてだった。
それがあるべき、騎士と次期女王の距離なのだろう。
そう考えるしかすることがなく足音が聞こえなくなるまでその場に留まった。
用事のある時以外は、使用人達が廊下や城内にいることは少なく周りに誰もいない静まりきった場所で、何も考えていない頭のまま窓の外を眺めれば城壁以外空だけが印象に残る。
とても広いけれどそれでも狭いこの建物の中では窒息してしまいそうだとしか彼は思えなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4905y/

Lily of firld

2011年12月3日23時50分発行